

SRID NEWSLETTER

No. 380 AUGUST 2007 国際開発研究者協会 創設者 大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.srid.jp>

「SRID、開発援助、そして今」 笹川平和財団 河野善彦
都市が地球を救う!? “The City rescues the Earth.”

国際協力機構・国際協力専門員 保科秀明

「SRID、開発援助、そして今」

笹川平和財団 河野義彦

・ 代表幹事の宮入さん副代表の大戸さん、それに事務局長の三上さんからお話があり、久しぶりに何か書くようにとの事である。休会会員なのにニュースレターへ投稿するというのも妙な気がするが、たって断る理由もないので近況報告を兼ねて近頃思うことなどを取り混ぜて書いてみようかと引き受けた次第である。

・ 思い起こせば SRID に入会したのは 1975 年頃であるから今から 30 年以上も前のこととなる。当時、勤務していた OECF (JBIC の前身) からフランス留学ということでソルボンヌ大学の IEDES というところへ派遣されていた際に、時の総裁であった大来さんが訪仏される機会があって OECD などに何人かいた創生期の SRID 会員との出会いがあった (高橋一生さん、田村修二さん等)。当時は慣れないフランス語をあやつって開発理論の勉強に四苦八苦していた訳であるが、十年ほどたった後にその OECD 事務局に籍を置いて各国の援助政策を審査する業務に携わることになるなどとは思ってもかけなかった (70 年代には OECF は殆どアジアが活動分野であり、私がフランス留学させられた背景には漸く始まったアフリカ向け円借款の一部が仏語圏にも供与されることから、急遽フランス語を解するスタッフを養成する必要が生じたことがあったのである。ちなみに、SRID 会員の不破氏は OECF では私より後輩にあたるが、フランス留学では彼の方が一年早く行っており、私が渡仏した際には何くれとなく面倒をみていただいた)。

・ この 30 年間に開発援助の世界も大きく変貌したが、援助実施機関に奉職した自分自身の職業生活は日本の ODA ドナーとしての栄枯盛衰と軌を一にするような気がする：例えば、

就職した年の1968年にはインドネシア向けの円借款が開始されておりそれ以来、対インドネシア向け援助は急拡大して長い間、日本援助の最大の受け取り国であった。また、1981年にソウルに赴任したわけであるが翌年から対韓 ODA を大幅に拡充する決定がなされ、大変多忙ながらも充実した駐在員生活を送ることができた。また、1989年に日本が ODA 世界一の地位を獲得したとき私は OECD の開発協力局にあってまさに DAC 諸国の援助パフォーマンスを評価・分析する仕事を担当していたわけであるが、国際公務員の立場ではあったものの祖国日本が量的・質的に援助内容を充実させていく姿を確認するのはやはり誇らしい気分であったのを覚えている。

- ・ 援助実施機関での職業生活を振り返って強く印象に残っているのはなんとといっても十年前、1997年に勃発したアジア通貨・金融危機とその後のフォローアップ期のことである。タイバーツが暴落した時点ではバンコックの OECF 事務所に勤務していたわけであるが、程なく帰国となり、もどった部署が業務第一部（アセアン各国と太平洋諸国が対象地域）ということで、それから2年余経済危機に瀕した各国に対する緊急支援・宮沢構想など多種多様な取り組みで大童の日々が続いた。殆ど毎月のようにいずれかの国へ出張する等多忙であり肉体的には辛かったけれど、未曾有の危機の中で果敢に新しいアプローチを試みる等懸命の取り組みをして相手国からも感謝された。幹部から担当者まで一丸となって頑張る中で過労のため倒れる者が出るのではないかという事を本気で心配しながらではあったが、やりがいのある毎日であった。

- ・ さて、丁度3年ほど前にも SRID ニュースレターへの投稿を要請されて書いたのが「一と二分の一の人生」という記事(SRID ニュースレターNo. 342 所収)である。元の職場である JBIC を辞した時であったから本来なら「第二の人生」と書くべきところであったが、第一と第二の中間的なものという趣旨でこのような題目とした経緯がある。その当時は笹川平和財団の他に山口大学、東京農工大学の役員他合計6つの役職を兼務しており、「六足のわらじ」を履きこなせるものだろうかと心配しつつも新生活への抱負を述べたように記憶しているが、3年経ってみて果たしてどうであろうか？

- ・ 結論を先にいってしまうと、様々の職場や立場を通じて新たに多少の人生経験は積んだものの抱負についてはなかなか期待通りにはいかなかったという感じである。尊敬する聖路加病院の日野原重明先生の言によれば、長い職業生活を卒業して第二の人生に移るのは「艦隊勤務から離脱して手漕ぎのボートに乗り移るようなもの」とであると表現しておられるが、言い得て妙である。これまで3年間の「一と二分の一の人生」が手漕ぎボートを乗りこなす上での準備体操として十分であったかどうか、疑問ではあるが人の寿命は限られており「生老病死」の難題も逃れる術はないとすれば、いつまでも準備体操ばかり遣っているわけにもいかないのです。そろそろ「真正」第二の人生へ移りたいとの気分が高まって来た昨今である。

- ・ とはいっても実は未だにあれかこれかと模索中故、胸を張って「これが私の第二の人生である」と提示できるようなことは何一つ無いが、最近になって始めたことは次の3つである：①韓国語（駐在時には話せたが、二十数年放置してあったものを再開。近い将来に韓国へのセンチメンタルジャーニーを敢行したい意向があり、将来的には日韓の市民交流

につなげることが出来ればというのが夢)。②開発社会学ゼミ（アジ研の佐藤寛氏主催の社会人ゼミで、隔週 1 回くらいのペースで土曜日の午後に来るもの。経済学で満たされないものを少しでも埋めたいと思い、息子や娘のような若い人達に交じって勉強中）。③ミクシィ（息子に勧められ、1 ヶ月前から試行中なるも未だ新しい出会いには繋がらず。皆さんもおやりであれば覗いてみて頂きたい）。

・ 今後やってみたい事とか、検討中のことを挙げると：①現居住地の我孫子市における地域デビュー(具体的には、当市に300もあるという市民団体・NPOの中から自分に合いそうなものを見つけだして、その活動に参画することから始める)。②市民講座もしくは本物の大学・大学院へ登録して受講すること。市民講座か大学・大学院では質的に異なるのでここは思案のしどころである。前者の場合は水彩画・俳句・園芸などの中から選ぶつもりであり、後者の場合はまず分野やテーマをどう煮詰めるかから始めなくてはならないが、最近読んだ2冊の本に触発されてかなり本気で思案中。(ちなみに、その2冊というのは坂本武信著「老学生の日記」と内館牧子著「養老院より大学院」である。)

・ 最後に、近年関心をもっているテーマ・イシューについて一言：①社会企業・社会起業家の役割②国境を超えた人の移動と多文化共生社会の構築③民際交流の一環としてのリンク運動 以上3つであるが、これ等は閉塞状況にあるかにみえる現代社会にブレークスルーをもたらす可能性を秘めているので、期待をもって注視している。出来ることなら、傍観しているのではなく自分の知見や自由時間を活用してなにがしかの貢献をしたいものと思ったりしているが、果たしてそのような機会が訪れるものやら？もしも3年後に再々度、投稿の機会があったとすればその時にでも報告いたしたい

都市が地球を救う!? “The City rescues the Earth.”

国際協力機構・国際協力専門員 保科秀明

近ごろ化石燃料の価格高騰に始まり、地球環境負荷の低減を目指した「エコ・ガソリン」導入がアメリカ、ヨーロッパ、ラテンアメリカ地域の各国で盛んに奨励されている。エコ燃料はとうもろこしやパーム・オイルなどから作るのだが、石油価格の高騰により、大量生産すればエコ燃料の生産コストは石油コストと変わりなくなると、十分に市場性が確保できるという。再生可能でありしかも環境負荷を軽減するというので、農業国ではこぞってとうもろこしやパーム・オイルの生産拡大に乗り出した。また熱帯雨林を持つ国では樹林を切り倒して、急速にオイル・パーム畑が拡大しているという。

ところがこの動きが思わぬところで副作用を起こしていることがわかってきた。食用・飼料用、その他の日用品の原料であったとうもろこしやパーム・オイルが品薄となり価格が高騰、また転作前の農作物も品薄となる。さらに熱帯樹林の伐採が大気中のCO₂の吸収力低下を招くと危惧されるとされ、環境学者の中にはエコ・ガソリン使用を控えるべきだ

とする見解も出てきた。もちろん廃材や木材チップからエコ・ガソリンを作ることは可能だが、まだ大量生産の技術は確立していない。

もともとエコ・ガソリンは地球上の自動車台数の急増に伴って、環境負荷を低減するために導入されてきた。しかしその思いもしなかった負の波及効果は環境負荷を低減しないばかりか、日常生活の物価上昇という広範な経済的影響を及ぼすことになったのである。エネルギー源を農産物や森林空間利用に際限なく依存すれば、人間の基礎的生存条件がドラスティックに変貌する可能性をはらんでいるとさえいえる。

この現象を別の角度から眺めてみると、一連の連鎖反応は伝統的な都市と農村の間に深刻な構造的変化をもたらすのではないか、ということである。

これまで農業地域では都市住民の食料需要に合わせて農産物を供給して所得を得ていた。都市人口の拡大、自動車の増加のなかで Co2 の増加を抑制しようとするならば、エコ・ガソリン使用は拡大の一步をたどるであろう。エコ・ガソリンは農産物の供給を食料需要目的ではなく、都市のエネルギー需要へと用途を変える。農産物の消費パターンが食料セクターからエネルギーセクターに変わることによって、都市と農村の経済的相互依存関係も変わっていく。

市場経済のメカニズムに従えば、エネルギー用農産物は食用農産物より単位あたりの出荷額が高いから、農地はエネルギー用農産物への転作圧力にさらされる。新たな開拓地もエネルギー用農産物生産に割り当てられる。つまり世界中で食用農産物の生産は減少する危険をはらむ。ところが世界の人口当たりの食糧消費量は増えることはあっても減ることは無い上、食糧自給ができない都市人口は増加の一步をたどる。絶対的な食料需要は明らかに増加する。つまり需要は増加するのに供給が減るということである。食用セクターとエネルギー・セクターとの間の価格均衡は食料品物価の高止まりで安定する恐れがある。

この経済変化は社会的にどんな現象を引き起こすのだろうか。ひとつははっきりいえることは、物価上昇についていけない都市貧困層の人口が一層増加する上、食品価格の上昇がそこに生きる人々の生活を直撃することである。現在世界では 8 億人以上（その多くが中国、インド、サブサハラアフリカ地域の農村部）が飢餓状態にあるとされるが、将来都市住民の間にさえ飢餓状態が発生しないとも限らない。現に日本国内では江戸時代以降戦前まで、都市部でも「米よこせ」運動が発生していたことが知られている。

もう一度振り返ってみよう。都市から発生した大気汚染は農村における食料生産の低下と価格高騰を引き起こし、これがために都市貧困がさらに進化する。そして深刻な都市貧困は社会不安を増長し、都市の治安攪乱に農村部の若者をも引き込みながら、ブーメランのように都市問題に回帰していく、といえないだろうか。自由経済の中で都市から発生し、ここから新たに発生する都市問題。市場メカニズムの枠組みの中で循環しながら変質して

いく都市問題のメカニズム。

恐らく、市場メカニズムの中では都市のメカニズムを変えなければ、地球環境を守る仕組みは出来上がらないだろう。農村地域、農村社会だけでは地球環境は守れない。これを逆説的に表現したのが「都市が地球を救う」というタイトルである。これからの都市計画は「地球を救うための都市づくり」をテーマにした取り組みの開発を目指すことが求められる。

当面政府の対応は、食用農産物の生産者へはこれまで以上の補助金を付与する一方で、エネルギー転換農産物への課税強化に向けられるのであろう。それにしても、食料品価格は高騰し、エネルギーコストの上昇は止められない。そしてこうした都市部における物価上昇は都市住民の低所得者層を直撃し、いずれ農村部へと波及していく。国民の所得格差は拡大し、低所得者への生活保障費も増大し、結局国家財政の負担を一層大きくする。この「負のスパイラル」を方向転換させるためには、小手先の短期的な行政手法では時間延ばしほどの効果しか期待できない。政治的意思決定者には真に深い将来への洞察力が求められる時代だ。